

【2000年度 第1回研究報告会】

日時 2000年6月24日(土)

於 名古屋大学大学院文学研究科 第7講義室

近世の地方(ぢかた)行政における村落類型観の成立

米家泰作 (愛知県立大学)

農村・山村・漁村という村落の3類型は、いつどのように成立したのだろうか。発表者はこれまで日本の山村の歴史地理学をテーマとしてきたが、近世以前の山村に関する研究を概観した際、村落を3つに類型化する視点自体が近世に成立したものであるのか、との問題意識を抱いた。このように村落を類型化して把握する視点を村落類型観と呼ぶとすれば、村落類型観とは単なる用語や便宜的な分類として捉えられるべきではなく、国土空間もしくは支配領域をある視点から俯瞰的に把握する行為と密接に関わった観念であって、国により時代により異なるものだと考える必要がある。これまで地理学においても日本史学においても、このような村落類型観の形成そのものを論じた先行研究はほとんど無い。例外的に、関戸明子が近代農林省における農山漁村概念を検討し、中世後期における「山村」の語の存在を示唆しているのが目を引く。ただし中世後期の「山村」・「漁村」は詩語であり、「農村」と対を成すものではなく、村落類型として確立していたものとは考えにくい。

では、近世日本の村落類型観を検討する際に、どのようなアプローチを取ればよい

だろうか。いわゆる「慶安御触書」には「山方」・「浦方」の暮らしを「里方」と対比的に提示する件がある。このように、一部の法令には、農村・山村・漁村に対置できそうな「里方」・「山方」・「浦方(浜方)」を見いだすことができる。しかし発表者が幕府法令を通読したところでは、村落類型が法的に定義された様子は窺えない。当時の村落行政のあり方を検討するには、法令よりも地方書(ぢかたしょ)が相応しい。現在までに翻刻された地方書は約70点にのぼり、その過半は幕府関係者が関わったものである。そこで発表者は幕府の村落行政を意識すべく、これら「幕府系地方書」に強く着目した。ただし地方書の利用に際しては史料批判的な注意が必要であり、発表者は翻刻された全ての地方書を通覧し、先後関係、引用・剽窃にも注意を払った。

さて、18世紀前半の幕府系地方書『県令須知』は、「村里に山方・里方・野方・浜方・市井・往還筋等の差別有」と説く。これらの村落類型的な語彙は17世紀末期以降の地方書に散見され、『農家貫行』(1736)や『民間省要』(1721)のように「山方」や「野方」の風俗を典型的に描写し、「里方」と対比した例もみられる。「山

方」の語が村落を含意して用いられるのは、鉄砲禁令や諸国山川掟をみる限り、17世紀後半からであり、近世初期には村落を類型化する語彙が用いられていたようには思えない。「山方」の語義に注意すれば、一つの村のなかの山野としての「山方」でなく、領土を大局的に俯瞰した際の山村として「山方」が意識されたのは、17世紀後半から18世紀前半にかけてのことであったと推測される。ただしそのような用法は、幕府の村落行政においては成立していたものの、諸藩においても同様であったわけではない。

次に、村落を類型化する視点はどのような文脈において必要とされたのだろうか。多くの地方書は、地方(ちかた)役人は「地理」の把握者・領土の管理官たるべきことを説き、各村の「村柄」の観察する方法を説明している。「村柄」とは、その村の立地環境と経済力を含意した用語で、とりわけ検地における石高の判定、検見における租税額査定に際して、特に「村柄」を考慮すべきだとされる。このような「村柄」への注目は17世紀後半よりみられるもので、近世初期の検地が各村の耕地の生産力と運輸条件に即していたことと比較して、非農業的な要素を租税額に盛り込もうとする意図が強い。松江藩の『田法記』(1682)や幕府系地方書『地方要集録』(1741)は、耕地の生産力を基礎とする石高制の租税制度をかたくなに遵守するままでは、「山辺」・「海辺」の非農業的収益を租税に取り

込むことができず、「山方」・「里方」といった「村柄」の違いに応じて柔軟に租税額を操作すれば良い、と主張している。この点にこそ、近世の地方役人が村落類型を強く意識せざるをえなかった理由があると考えてよい。地方書の多くは、稼ぎの村として「山方」と「浦方(浜方)」を類型化している。これは、「里方」を農業の村として位置づけ、農業専一を免除された村落類型として「山方」・「浦方」を提示する立場であったといえる。享保期以降の新規商売停止令が、「山方」・「浦方」における商売を特に許容しつつ、一般の村落に対して商売を否定したのは、このような村落の選別と呼応した政策であった。にもかかわらず、「山方」は常に農業を免除された類型として位置づけられていたわけではなく、一部の地方書が「山方」における農業の劣弱さを非難しているのは注目される。近世の「山方」は、農業と稼のはざまに立たされていたのである。

以上の検討を振り返れば、従来の近世史・近世歴史地理学が用いてきた「農村」・「山村」・「漁村」概念は、近代以降の農山漁村概念をそのまま近世に持ち込んでいた面が無かったとはいえない。近代の村落類型観は、近代に新たに創られたものではなく、近世のそれを継承していたことが推測される。しかしその際に、例えば「野方」が欠落するなど、近世とは性格が変化した面もあったはずである。近代農政に詳しい方のご教示をいただければ幸いである。

隠岐の地誌『増補隠州記』(1688)の分析

溝口常俊 (名古屋大学)

地誌が従来の地理学的研究、あるいは歴史学的研究の中で取り上げられることはままあったが、それはあくまでも系統的な主題のもと、例えば人口、土地利用などにおいて、その概観をおさえるために利用さ

れたにすぎず、地誌そのものが主役として扱われることはなかった。それはひとえに個別事項の記述の薄さ、網羅的記載によるわけであるが、見方をかえれば地誌研究はよみがえるであろう。すなわち、単一項目、

系統項目のピックアップ利用型研究ではなく、地誌の特色を活かした総合的分析をめざすのである。

本発表で、隠岐の地誌『増補隠州記』を例にして、その地誌記載事項をできる限りデータベース化し、分布図を描いたのはそのためである。こうした図表を比較考察することによって、次のような地域像見えてきた。すなわち、隠岐の村落の生業は、農業、漁業、林業の三位一体を基本としていたこと。それは戸口規模のいかにかわららずすべての村に水田、畑がもうけられ、新田畑開発がなされていたこと、海に面していない村を除いてすべての村に漁請役が課せられていたこと、そして木材の切り出し、薪採りの記載が多く村でみられたこと、などから窺える。

隠岐の個々の村は生業のあり方に共通性を持っていたと同時に、その中身、特に

漁業においてするどい個性をもっていた。それが隠岐全体という社会に置いて統合され、その主要部分が商業、交易という形で対外的にアピールできるように調和していたといえよう。視点を家単位に落としても、農・漁・林のバラエティに富んだ生業を行おうという姿勢、いわばミニ村落的行為、これが非常に強くみられた。いいかえれば、隠岐は家族というミニ村落を多数抱えた自己完結指向の強い村落、そして個々の村落で達成され得なかった部分を、主産地形成というもう一つスケールの大きい領国内で補完させる装置を有していた。その上でさらに対外交易を発展させてきたのである。

こうした姿は隠岐だけではなく日本の前近代の村落構造の共通した特色ではなからうか。(参加者：31名)

【名古屋地理学会事務局から】

『名古屋地理』の形式変更について
2000年度総会で決定したように本年度から『名古屋地理』をニューズレター形式で配布することになりました。同時にインターネット誌として名古屋地理学会のホームページに掲載されることになりました(URLはhttp://www.geogr/lit.nagoya-u.ac.jp/nagoya_geo/index.html)。なお、1999年度の『名古屋地理』は9月初旬に発刊予定です。

シンポジウムパネラーの募集

岐阜地理学会との合同シンポジウムが2001年

1月27日(土)にKKR三の丸(名古屋)で行われることになりました。シンポジウムのテーマは「愛岐地域の商業空間の再編成(仮題)」です。シンポジウムでの報告を希望される方は事務局までご連絡ください。

第2回研究報告会のお知らせ

第2回研究報告会を2000年9月9日(土)、名古屋都市センターで開催します。テーマは「総合的学習とまちづくり」です。みなさまのご参加をお待ちしております。なお、詳細は同封したパンフレットをご覧ください。

名古屋地理 第13号・1
2000年8月発行
編集・発行 名古屋地理学会
〒464-8601 名古屋市千種区不老町
名古屋大学文学部地理学教室内
Tel.052-789-2236
Fax.052-789-2272
電子メール ohn-ishik@lit.nagoya-u.ac.jp

名古屋地理

No.14-3 2001.2
名古屋地理学会

【2000年度 第2回研究報告会】

シンポジウム「総合的学習の時間とまちづくり」

主催：名古屋地理学会 共催：(財)名古屋都市センター

後援：名古屋市教育委員会、愛知県教育委員会

日時 2000年9月9日(土)

於 名古屋都市センター大会議室

地理の学習にも生かされる“総合人間科”

佐藤俊樹 (名古屋大学教育学部附属中・高等学校)

2002年度から完全週5日制が始まり、これに合わせて教育課程にも大幅な改定がなされる(高校では2003年度)。その目玉が『総合的な学習の時間』である。新教育指導要領には“生きる力”ということばが多く出てくる。従来行われてきた講義型の授業では、知識は身につけても議論したり発表したりする能力は育たないとの判断から、新しく『総合的な学習の時間』をスタートさせ、「自ら学び、自ら考え、主体的に判断し、よりよく問題を解決する資質や能力を育てる」、「学び方やものの考え方を身に付け、問題の解決や探求活動に主体的、創造的に取り組む態度を育て、自己の在り方生き方を考えることができるようにする」という目的を掲げ、“生きる力”を育もうというねらいがあるためである。

名大附属では1995年度から文部省の研究開発指定を受け、“総合人間科”という名でこの新しい時間の実践研究に取り組んできた。その軸は、

・脱学校・脱教室、・脱教科、・脱偏差値という「3つの脱」である。さらにその教科像として、(1)各教科では捉えきれない、かつ避けることのできない現代の課題を総合的に学習する、(2)これら現代の課題を、フィールド体験を通し、地域、社会の多くの人々から学びながら、生徒自ら問題解決していく、(3)現代の課題を自ら学び探求する中から社会・自然のあり方と自分の人生課題を重ねていく「人生の自覚的選択」=「生き方」をつかむ、という3つを掲げている。実際には中1と高3で「生き方を考える」、中2と高1で「生命と環境」、中3と高2で「平和を学ぶ」という学年大テーマを設定し、個人研究(中1・中2・高1・高3)およびグループ研究(中3・高2)という学習形態で、自分たちの興味関心に基づいた研究を行っている。教員は学年団がチームを形成し、さまざまな教科の教員が約20名の生徒を指導教官となって担当する形となっているが、あくまでも研究活動の主体は生

徒であり、教員は助言者としての性格が強い。1年間の研究活動の中で最も重要なものがフィールドワークである。中1のはじめに上級生や友人の家族に対するインタビューを行い、訪問聞き取り調査の練習を積んだあと、中2になるといよいよ個人テーマに基づくフィールドワーク(夏休みと11月の平日)に出かける。訪問先は名古屋大学の諸研究室・官公庁・企業・ボランティア施設など様々である。さらに中3や高2では広島や沖縄の修学旅行のさいにまる1日フィールドワークを行っている。1年間の研究成果は研究集録にまとめられるほか、プリントからビデオ・パソコンを用いたものまでいろいろな形態が見られるプレゼンテーション、さらにはディベートやパネルディスカッションというような多彩な表現活動で締めくくられる。

このような経験を積んだ生徒たちは教科の学習にもその力量を発揮する。とくに地理の場合、デスクワークだけでなくフィールド学習も大切な科目であるため、総合人間科での経験は大いに生かされる。中学の「身近な地域」、高校の「地域調査」の単元でレポート学習を毎年行っているが、文献調査だけでなく総合人間科の経験を生かして野外調査に出向く生徒が年々増加している。生徒にとつたアンケートからも総合人間科を経験したことで、・まとめる力の向上、・資料探査能力の向上、・他人への質問の仕方がうまくなる、・プレゼンテーション能力の向上、・自ら学ぶ姿勢の育成、といったメリットがあることが明らかになった。ある高2の生徒は「総合人間科によって既に書き慣れているというのは大きなメリットである。レ

ポートを書くにあたって困惑せずすむ。資料をただ書き写すだけでなく、自分の考えや意見など自己の表現をする余裕が生まれ、よりよいレポートとなる。」と述べていた。生徒の能力の発露はこれだけにとどまらず、高3でさせている生徒授業では、じっくり教材研究をして50分間やり遂げてしまう者もいる。また、「愛知県三河山間部から見た過疎化」というタイトルで教材用Webページ制作コンテスト(ThinkQuest@JAPAN)にチャレンジし、入賞を果たした中学生もいる。

教師にかかる負担が従来の教科に比べて格段に大きいか、大学入試が変わらなければ形骸化して補習授業に時間にされてしまうとか、総合的な学習の時間には立ち足る壁がいくつもあるとよくいわれる。また、本校では、最近マンネリ化して教師の熱意が薄くなってきているという生徒からの厳しい批判があるのも事実である。しかし、完全実施まで残された時間が少なくなってきている今、学校一丸となってアイデアを出し合い、勇気を持って取り組みをはじめていただくことを願ってやみません。生徒たちは確実に成長し、驚くほどの変貌を遂げることを請け合いです。

この短報を読まれて総合人間科に興味をもたれた方の学校訪問を歓迎いたします。TEL:052-789-2680(教官室)、e-mail:sato-to@highschl.educa.nagoya-u.ac.jpまでご連絡ください。

町に親しみ町と高め合う子どもの育成

- 総合的学習「町学習」と地域連携 -

柴田幸夫 (西尾市立西尾小学校)

1 町づくりに子どもが関わる

西尾小学校は、六万石の城下町西尾の中心部に位置する学校である。

西尾は、かつては三河三都として栄え、近世からのにぎわいは、近代になっても引き継がれてきた。しかし、ここ15～20年前より、郊外に大型商店ができたり、自動車社会への対応が遅れたりして、中心市街地の空洞化とともに地域の活力が失われつつあり、子どもにとって魅力的な町とはいえなくなっている。

そこで、学習者である子どもを「小さな町づくり人」と位置づけ、積極的に魅力ある町づくりに関わらせることにした。そして、自分たちの住む町をより住みやすい町にしようと考えさせる活動を通して、市民意識を芽生えさせ、公民的資質を高めていこうと考えた。

2 町を素材にした総合的学習「町学習」の推進

西尾の町の歴史は古く、城郭を囲むお堀や城門の跡が学校の中にも街角にも見られる。城下のあちらこちらには、位の高い神社や立派な構えの寺院が多い。また、町中には興味を引く建物や樹木、その場所にまつわる民話や言い伝えも多く、関われば関わるほどおもしろい。

そんな城下町の文化や歴史を大切に守り、この環境に育つ子どもが「こんな町に住みたい」とか、「私のふるさとは由緒ある町なのだ」と未来につなぐ夢を描くことを願って構想してきたのが総合的学習「町学習」である。

3 開かれた学校へ(PTAからPTCAへ)

町を舞台にした総合的学習「町学習」への取り組みでは、学校、家庭、地域を見直すことは必要かつ絶対条件である。

そこで、私たちは家庭を含めた地域との具体的な連携を考えた。従来のPTAという考えから地域(Community)との関連をより深めた、PTCAという考え方に至った。そこで、連携を深めるためのアクションを起こし、家庭教育力、地域教育力を高めることに力をいれてきた。

幸いにも、この町には小学校にきわめて強い愛着を持った地域の方々が多い。また、学区には住んでいないものの西尾小学校の卒業生やこの町をこよなく愛する人々も多い。そうした方々からの支援も含めてPTCAの組織化を図り新しい地域連携の姿を模索している。

4 教育実践の内容

(1) 総合的学習「町学習」のカリキュラムづくり

めざす子ども像

本校が地域と深く関わって創り上げていく総合的学習が「町学習」である。

そして、「町学習」の中で、

・ふるさとを語れる子

「町の人、物、事を自慢できる子」

・全力で考え、行動できる子

「興味や関心をもとにして、今持っている知識や経験を、思い出したり、重ね合わせたり、組み替えたりして、目の前にある事実を考えていこうとする子」「自分の考えを実現するために、行動しよ

うとする子」

をめざす子ども像とした。

単元作成のスタンス

めざす子ども像を実現する単元を構想するとき、子どもたちの発達段階と町学習の性格を考慮し次の四つの段階とつけさせたい五つの力群を設定した。

ア)活動ステップ:明確な区分けはせず町学習での段階を考える目安とする

1年	2年	3年	4年	5年	6年
愛着		共感		参加	提案

イ) 町学習の力群

・問題を発見する力 ・調べる力 ・考え、判断する力 ・表現する力 ・活かす力

(2)各学年の実践単元名

1年「この木・なんの木・ぼくらの木」学校や学区にある大きな木に愛着を持つ

2年「西尾の民話づくり」民話を通して町や町の人々と楽しんで関わる

3年「大好き！この人、この町！」自分にとって

お気に入りの人を見つける

4年「ぼくら、城下町、水調査隊」川を調べ、水環境を通して町づくりに関わる

5年「発見！そこがみそ」地元のみそやを調べ、地場産業に誇りを持つ

6年「住みやすさ、町改造計画」町に親しみ町の将来を考えようとする

(3)地域連携のあり方

・町学習および町学習に関わる行事への地域の人々の参加

・親子まちステキ発見ウォーク

・町学習セミナー

・町の先生、ボランティアなど人材開発

・PTA・まちづくりNPOなどの地域からの支援開発

・「パソコン教え隊」の新たな支援開発

・「セーフティボランティア」の創設と活動計画作成

・「お父さんお助け隊」活動の具体化

・学校・家庭・地域を結ぶ情報ネットワークづくりの支援

「見て触れて感じると行動が変わる」

鳥山欽示(醸造元(株)はと屋 代表取締役)

西尾小学校5年生の子供達が、味噌学習をやりはじめて、3年目になります。子供達は授業として、まず、味噌蔵見学に虜子できます。最初、第一声は「臭い!」「いい匂い!」、さまざまな反応があります。味噌蔵は1904年築、醸造の蔵特有のいろいろな匂いがするのです。最近の子供達は匂いのレポートが少ない感じがします。次に子供達は100年も使い込んだ杉の大きな樽を見学します。自分の背よりも、うんと高い桶に、みんなビックリ。その上に積み上げた石もただ見つめています。なにもかも、初めて見るものばかりですから、無理もないでしょう。その後、いろいろなテーマ事に別れて、子供達は勉強にやってきます。あるグループは桶について研究するので、桶の材質は?構造は?など質問します。また、メジャーを使い、桶の高さや円周などを計測したりもします。また、あるグループは味噌や醤油を売っている売店にやってきて、どの味噌が一番人気?何種類ある?どこが違うの?など質問します。そこでは、味噌にもいろいろ種類があり、作り方も違うことを教えます。色で分ける、原料で分ける、塩辛さで分ける。みんな熱心にノートしていきます。味噌学習は体験と勉強をバランス良く行います。味噌の仕込み体験は実際に味噌玉糀と塩、水を学校に運び、子供達に仕込んでもらいます。糀がびっしりつき、少し黄色ぼくなった味噌玉糀を手でほぐします。私は子供達に質問します。「どんな感じ?」子供達は「温かい!」と答えます。味噌玉糀は微生物が活発に働いているので温かいのです。子供達に「その温かさを感じて覚えていてね!」ほぐした味噌玉に塩水を混ぜず。まるで粘土遊びの

ようです。「ちょっと舐めてみて」そう言うと、子供達は恐る恐る小さな指を使い、舐めてみます。「塩辛い!」あちこちで声がします。「そう塩辛いよ、その辛さを覚えていてね!」とお話します。匂い、手の感触、味、普段使わない人間の五感に刺激するように体験してもらいます。文字による記憶よりも五感による記憶のほうが子供達の原体験として、一生忘れない記憶になると思います。それが私の味噌造り体験のねらいです。1時間くらいで味噌仕込み体験は終了します。80L入る桶に仕込んだばかりの味噌が入りました。見た目も味も全然味噌らしくありません。しかし、春が過ぎ、夏が来て、秋が行き、冬になると微生物の働きで味噌ができるのです。今回は特別な「みんなが造った味噌」ができるのです。子供達には「微生物が時間をかけて味噌にしてくれるんだよ」と繰り返し伝えて実習は終わります。

仕込んだ味噌は、1週間くらい落ち着かせて、獅こし蓋と重石を置きます。重石を置くことにより、汁が上がり全体が均一に熟成していくのです。夏休み前、少し、味噌の香りがしてきた桶を子供達は観察します。ここでも、味噌の色や触った感じ、舐めてみた感じを大切にしたいので実際に体験してもらいます。夏休みが過ぎ、秋が来て、いよいよ味噌が出来上がる冬です。子供達は3学期に自分たちの仕込んだ味噌でアイデア料理など味噌を使った料理に挑戦します。また、味噌を少しずつ、家に持ち帰ります。自分たちが手をかけ時間をかけできあがった味噌を、子供達は大切に扱います。例えば、味噌汁を残していた子供が残さなくなる。また、人においしいからと奨める。物が

溢れ、物を大事にといっても真意が伝わらない現代に、自分が手をかけたり、興味をもったりすることにより、物を大事にする気持ちが子供達には芽生えるのです。日頃、身の周りにあるいろいろな物も、それができるまでには、多くの人と、様々な手間がかかっていることを、この味噌学習を通して、理解して欲しいと思います。そのためには「見て触れて感じる」ことが必要だと思います。そうすれば行動が変わるのです。

今後の味噌学習の発展型として次のようなことを提案します。4年生で味噌の材料となる大豆を作る。大豆は春に植えて、冬に収穫できます。畑を借り、植物を育てる農業体験も今の子供達が体

験できない大事な勉強だと思います。5年生には、自分たちで作った大豆で、味噌を造ります。そして6年生では、その味噌を製品化し、実際に売るといふ商業体験を勉強します。子供達は物を買うという消費にはなれていても、物を売るといふ行為に関しては不慣れです。経済の基本である。物を売るといふ勉強は生活力のあるたくましい子供達を育成していくためには必要でしょう。そこではインターネットを利用するなどの工夫もおもしろいでしょう。小学校では基礎的な学問を修得するとともに、生活に役立つ原体験をしていくことが大切です。そのチャンスを総合的な学習という時間が与えてくれるのです。

まちを愛する気持ちを高める総合的な学習の指導

～大曽根中学区の探検隊活動を通して～

瀧田健司（名古屋市立大曽根中学校）

キーワード：中学校における総合的な学習 体験学習 学区探検 まち学習(urban studies)

1 はじめに

これまでの実践で、**まち**の環境問題について学習させたときに感じたことがある。生徒たちは「自分の住む**まち**に環境問題があり、その原因は自分たちの生活にもある」ということに気づくことができるが「自分自身ではどうすることもできない」という無力感を感じて、行動化に結びつきにくい傾向があるということだ。

環境の学習を進めていくと、自分たちの未来をつい悲観的に考えてしまいがちになる、という皮肉な結果のようにみえる。「**まち**の環境のマイナス面にばかり目を向けずに、もっとプラス面に注目させてみたらどうだろう。そこから、**まち**を愛する気持ちが育ち、住みやすい**まち**づくりのために自分自身にできることを考えて、行動し

ていくことができるのではないだろうか」と考えた。

そこで、自分から意識的に**まち**の良さを探して歩き回り、人と交流することから、**まち**を愛する気持ちを育てようと考えた。自分から働きかけることで還ってくるフィードバックが、新たな意欲につながり、次々と学習を進めていけるように…。

こうした学習活動を行うのは、従来の教科領域の枠では難しいため、本研究では「総合的な学習の試み」と位置づけて、学級活動の時間を中心に実践した。

(対象年度及び生徒：平成10年度 名古屋市立大曽根中学校 1年B組 37人)

2 研究の経過

実践の流れを次の図に示す。



学区の探検活動を行う前に、「校内探検」を上図と同じ流れで行い、トレーニング段階とし、いよいよ学区探検を行った。

(1) 探検隊活動

9班を編成し、くじ引きで探検地域を決めた。各班には「自転車を使わず、足で歩き回ろう。五感を使って歩き回ろう。まちの良さを探しながら歩き回ろう。人と関わりながら歩き回ろう。」という留意点を示した。探検活動は、授業後、または休日に行わせた。2つの班の活動の様子を紹介する。

「この商店街ちょっと古い感じだけど、いいね」
 「看板出したらみんなに知ってもらえるのに」
 「こんなところにボクシングジムがあるよ」
 「ここは静か、鳥の鳴き声がいっぱいするね」と、詳しく探検した。

「あっ、ここにもコンビニがあるよ」「あれ、あっちにも」と、狭い地域に3軒のコンビニエンスストアを発見した。「お弁当屋さん、何が売れますか?」「平安通の駅員さん、利用客の多い時間は?」と、多くのインタビューを行った。

探検隊活動で「普段気づかぬところにまちの良さを発見できる」「インタビューによって、まちの人々との交流を深めることができる」という効果があった。

(2) ポスターづくり

探検活動で得られた発見をもとに、B紙にポスターを作らせた。探検中に撮った写真や店のチラシ、イラストで、各班ともに多様な表現をすることができた。

(3) ポスターセッション

ポスターセッションとは次のような形式で行う発表会のことである。

全体を発表グループと聞き役グループの2つに分ける。前半、発表グループの生徒たちは調べた内容を書いたB紙をポスターのように貼りつけ、発表を聞きに来る生徒に3～5分で説明する。聞き役グループの生徒は、1つの発表が終わると、聞きたい発表のコーナーに自由に移動する。後半はそれぞれの役割を交代する。

クイズ形式や、劇形式で自分たちの発見を発表する発表者と聞き役の間には、質問やその受け答えが活発に行われていた。ポスターセッションによって、「発表者と聞き役の間が近いので、コミュニケーションが取りやすく、発表会に全員が主体的に取り組める」「他の班の発見したものを知ることで、多様なまちの良さを認めあえる」という効果があった。



<ポスターセッション>

(4) 大曽根駅に一般展示

自分たちの活動をまちの人々にも知ってもらおうと、大曽根駅の構内にポスターを貼らせてもらうことにした。貼っている作業中から、通りがかりの人が熱心に眺めてくれ、お年寄りから「私らはこういうのが楽しみでねえ」「あんたたちいい活動しとるねえ」と声をかけられたりした。自分たちの活動に対するまちの人々の反応や評価が思いがけず良いので、生徒たちはうれしそうに誇らしげであった。

この実践を終えて生徒たちからは、「じっと見て歩けば、良いところも悪いところもみえてくる」「自分が一番成長したのは、この大曽根の良さを見つけることができたことだ」「なんだか勝手にからだは動いて、歩行者用道路を掃除してしまった」「まちの人と話すようになった」などの感想や変容ぶりが寄せられた。

生徒たちは、まちの良さを探して、自分からまちに働きかけた。まちを見る目が変わり、いろいろな発見があった。まちに住む人との交流もあった。自分たちが認められているという自信もついてくる。こうなるともう、まちに対して無関心でいられな

3 まとめ

くなり、自分にできることを探し始める…。
小さな働きかけをきっかけに、**まち**を愛する
気持ちが高まっていった。

今回の実践で、**まち**を題材にした総合的
な学習には、大きな可能性があることがわ

かった。今後も柔軟な発想を大切に総合的
な学習の研究を重ねていきたい。

(シンポジウム出席者68名)

【名古屋地理学会事務局から】

『名古屋地理』の発送が遅くなり、申し訳
ありませんでした。

前回のニューズレターのナンバー

前回のニューズレターのナンバーが第13号
・1となっておりましたが、第14号・1の誤
りです。申し訳ありませんでした。

岐阜地理学会との合同シンポジウム

岐阜地理学会との合同シンポジウムが2001
年1月27日(土)14:00～17:00 KKR三の
丸(名古屋)で行われます。テーマは「愛岐

地域の商業空間の再編成」です。終了後、懇
親会もあります(¥5,000円程度)。是非ともご
参加ください(同封の資料をご覧ください)。

地理情報システム学会中部支部シンポジウム
地理情報システム学会(GIS学会)中部
支部シンポジウム『中部を拓くGIS』が1
2月1日(金)10:30～17:00名古屋都市セン
ターで開催されます。入場は無料です。是非
ともご参加ください(同封の資料をご覧ください)。

【2000年度 第3回研究報告会】

名古屋地理学会・岐阜地理学会合同シンポジウム

「愛岐地域の商業空間再編成」

日時 2001年1月27日(土)

於 KKR名古屋三の丸会館

名古屋の商店街の新しい取り組み

小宅一夫(名古屋市市民経済局産業部地域商業課商業地整備係長)

昨年6月1日に大規模小売店舗立地法が施行され、商業調整から社会調整に方向転換をし、商業をまちづくりの視点から捉え直す必要になった。企業活動が経済効率を追い求めるようになって、商業の面でも地域と乖離した経済活動が行われてきた。しかし地域との関わり合いや、生活優先へと社会の流れが変わり、商店街の役割を見直すことが求められている。まちづくりの中で、商店街を中心にした地域の生活のアメニティを向上させていくことの期待が高まっている。

そのような流れの中で、名古屋市内の商店街も少しずつ新たな取り組みをする動きが芽生えてきており、今後の先駆けとなる商店街のいくつかについて紹介する。

最初に環境に対応し、NPOなどを取り込んで新しいまちづくりを行っている商店街として中村区の大門商店街がある。名古屋駅から西へ約1.5kmに位置する名古屋市西部の拠点的商店街で、名古屋市の商業地整備モデル地区に指定されている。商業地整備モデル事業とは、著名なコンサルタントが提案した地区の開発コンセプトを、地元と行政がソフト・ハードの両面から整備していくもので、大門地区では地元が実施したお祭りモニュメントやアーチの整備に歩調を合わせて行政側の事業として情報キオスクシステムを構築した。これは、コンピューターを活用した地区の情報案内システムで、商店街や周辺地域の様々な情報を来街者に提供するもので、商店街の民地4カ所に電話ボックス型の情報端末(KIOSK)が設置され、組合事務所に設置した情報サーバーと光ファイバーでネットワークされている。基本的なハードと

ソフトは行政が作り、情報の更新・管理は地元で行う方式である。また、情報キオスク設置の準備と時期を同じくして、地元では資源ごみの回収を行うリサイクルステーションを名古屋市内の商店街で初めて実施し、買物かご持参運動やリターナブル瓶の促進などに広げ、リサイクルの取り組みを積極的に発展させている。

この中から、リサイクル活動の推進と情報キオスクの利用率の向上が両立できる仕組みを議論する中で、ゲームセンターを運営する組合の役員がエココインのアイデアを思いついた。このコインは、リサイクルステーションに資源ごみを持ち込んだり、買い物袋を持参して買い物したり、箸を持参して飲食したりするなどのエコ活動に協力した消費者に提供され、情報キオスク端末に挿入すると、各商店が提供する割引券や商品引換券が当たる。また、1枚10円としても商品購入時に利用でき、消費者はエコ活動に協力すると得になり、商店も販促に活用することで売上げを増加させる要因となり、両者が得になるシステムで、継続的に発展していく仕組みとなっている。それ故に、将来、大門商店街のみに流通するエコマネーの機能を果たす可能性を持っている。

また、NPO(非営利団体)である「起業支援ネット」が、商店街の空き店舗を活用して事務所を開設し、地域に根ざした事業である「コミュニティビジネス」を起業したい人を教育して、立ち上げまで支援する活動を行っている。特定非営利活動法人である「起業支援ネット」の研修を受講した主婦が、大門商

店街の空き店舗を活用してリサイクル工房をオープンし、さらに隣の空き店舗には不登校の生徒や引きこもりの若者の作った作品を販売するショップが、間もなくオープンする予定である。このように、商店街の外部の人達が、商店街の入り込み、地域の生活者の新しいニーズに合った新しい事業を興し、商店街の組合員と交流し、知恵を出し合うことで、既存の枠組みを超えた思いがけない波及効果が生まれる。

その他、天白区のシマダ商店街、瑞穂区の雁道商店街などでも、高齢者に対応した商店街づくりを目指し、高齢者のみに発行するシルバーカード事業を始めた。これは各店舗が競って高齢者に付加的なサービスを行い、移動手段のない高齢者に商店街の利用の回数を高めようとするものです。

また、天白区の植田商店街では FAX で注

文を受け宅配したり、地域団体の情報を生活者に提供する FAX ネットワーク事業を行うなどして、地域の高齢者に支持されている。

このように、商店街を中心にした新しいまちづくり活動は、商店街の活動を通して地域の生活者のアメニティの向上に貢献している。21世紀の課題である環境問題や少子・高齢化などに関する地域コミュニティの様々な課題に対して、商店街が地域の生活者と一体となって解決していき、地域の生活のアメニティの向上を図りながら、持続可能な地域コミュニティづくりを進めていくことが必要であり、名古屋市では平成12年度より「地域活性型商店街推進事業」を創設して積極的に推進している。

インナーシティ“柳ヶ瀬”の再構築

安元彦心（鶯谷中学・高等学校）

現在、地方都市において「中心市街地の活性化」が問題にされているのは、地域住民に親しまれてきた伝統的商店街が単に衰退しているという事実だけではない。中心部のランドマークとされてきた百貨店の撤退、郊外に建設される大型複合商業施設・娯楽施設との競合、さらに夜間人口の減少・少子高齢化の進行により中心市街地が地方都市の中核としての機能を喪失しつつからである。

岐阜市の“柳ヶ瀬”は、他の地方都市の中心市街地と異なり、タウンセンターであるJR岐阜駅前の繊維問屋街のインナーシティとして独自の商業空間を形成してきた。京都近鉄百貨店撤退(1999.9.30.)という事実は、空洞化している“柳ヶ瀬”の実態をあらためて浮き彫りにさせた。近鉄百貨店撤退後、同じ柳ヶ瀬地区にある高島屋岐阜店の2000年上半期の売上高は、わずか2.1%しか伸びていない。また、当地区の同年高齢化率は、明德校下28.4%、徹明校下30.5%(市内平均17.5%)と、モータリゼーションによるエッジシティ化および核家族化により空洞化を加速させている。

“柳ヶ瀬”の再構築のスキームとして、都市構造、ビジネス、土地、リーダーシップの4点があげられる。

については、行政主導の「まちづくり3

法」にもとづいた市街地整備事業が、JR岐阜駅前から柳ヶ瀬にかけて進行中である。今後は、単に箱物の整備に終わるのではなく、コジェネレーション発電・トランジットモール・リサイクル工場など「コンパクトシティ」の発想が必要であろう。

については、地元生活者の利益を最優先させた上で、集客力をつくりだすためのNHK大河ドラマのような全国規模のインパクトのある情報発信機能を望みたい。地場産業では、『レップマート』に見られる高品質・低価格商品の提供や中国研修生を中心とする「岐阜チャイナタウン」、『アクティブG』の柳ヶ瀬版ともいえる「まちかど博物館」、特殊浴場街の「ジェンダー博物館」のほか、木曾三川を利用した「濃尾平野横断クルーズ」、高齢者あるいは観光客のための「動く遊歩道」などの話題性が必要である。さらに、それらのソフトを県内のみならず全国に向けて発信できる、観光・通信分野の《異業種コラボレート》が必要である。

については、中心市街地では地価が高く、新しいことを導入できない。やる気のある人が地価を反映したような賃料を払えない。再開発をしようとするれば、土地の権利が簡単に動かない。といった問題がある。そのためには、NY市アライアンス地区(通称：シリコ

ンアレー)にみられるような、税・通信料・賃貸料におけるインセンティブの供与も考えられる。

については、行政レベルの「政令市構想」や「河川流域連合」といった広域行政の見直し、財政の効率的運用からも必要となるであろう。市民レベルでは「産学共同研究会」「NPOセンター」といった発想とスキルを提案できる組織の整備が急務である。

しかし、郊外型大型店やコンビニエンスストアでの消費行動が定着しつつある多くの市民と、中心市街地への関心は希薄であるといえる。行政にとっても、膨張する都市人口を郊外ニュータウンの建設により解消してきたため、その政策転換は容易ではない。

よって、いかにして中心市街地の抱えている問題点を社会にアピールできるか。おそらくそこが、一番大きなアポリアであろう。また、中心市街地に内在する多くの組合の《護送船団方式》の従来の活性化策には限界があり、郊外型大型店との競合を経営戦略としている店主は、別に郊外店にチェーン展開しているのが実態でもある。

地域住民の心のよりどころとされてきたかような商業空間の衰退は、市民にとり自己の生活や歴史のイメージと重なる文化の衰退でもある。地域社会が歴史的に育み、誇りと親しみをもち維持してきた中心商店街のもちうる新たな可能性を探る作業は、今後ますます求められるであろう。

大垣市中心地活性化の一例 - 大垣城はなまる一座 -

柳 幸治 (大垣郭町商店街振興組合青年部長)

大垣郭町商店街の青年部長の柳です。岐阜地理学会の伊藤安雄先生は大垣北高校時代の恩師でして、本日は先生の前でテストを受けるようで大変緊張しております。

まず最初に現在中心商店街を取り巻く環境についてお話したいと思います。皆さんは「レッドデータブック」をご存知でしょうか。世界中の絶滅に瀕している動植物を載せた本ですが、その本にはキリンや象とともに、ついに「めだか」が載ったそうです。私は日本中の中心市街地にある商店街のお店は「めだか」と同じ状況だと思います。昔はどこの町にも土手に囲まれた小川が流れ水草が生え、小さなめだかも住める環境がありました。ところが高度経済成長の名のもと、護岸はコンクリートで覆われ水の流れは速くなり、めだかにとって住みにくい環境になりました。加えて外来種のブラックバスに食い荒らされ、どこにでもいた、めだかは絶滅の危機に瀕しています。これはまさに自動車の普及とともに道路網のインフラが整備され、全国規模のスーパーや外資系のスーパーにシェアを奪われた商店街と重なって見えます。つまり商店街は「めだかの学校」ともいえます。一度いなくなっためだかを取り戻すには大変なことだと思います。

また、最近規制緩和でお米やお酒も広く販売できるようになりました。電話一本で配達してくれるそれらのお店や店屋物の蕎麦屋さん、郊外のチェーン店の影響でどんどん

減っています。高齢化が益々進み、一人暮らしのお年寄りにはとっても不便な社会になりつつあります。

阪神大震災のときに地域に密着した商店の親父さんが活躍したという話を聞いたことがあります。隣近所の付き合いが疎遠になった都会で、「あそこには一人暮らしのおばあちゃんがまだ埋まっている。」といった情報を一番知っていて、陣頭指揮をしたのは店主だったということです。

さて、そんな中私は郭町商店街の中で「あきんどマップ」という買い物マップを作ったり、「フリーマーケット」を開催したりして商店街活動や街づくりに取り組んできました。折りしも大垣にもTMO(Town Management Organization)ができると言うので、そのための中心市街地活性化計画が作られようとしていました。私は街づくりグループの「あきない塾」を立ち上げ、様々な提案をしました。その中の一つに「西美濃戦国博覧会」があります。これは西暦2000年の年に関が原の戦いから400年を迎えるにあたり、商店街に隣接した大垣城を中心としてそれにちなんだ地方博を行おうというものです。それが基となって昨年半年間に渡って開催された「決戦関が原大垣博」に結びつきました。入場者は目標の60万人を超えて約75万人の方が来場され、最近の地方博の中では成功だと評価されています。しかし、私が一番期待した中心商

店街の活性化という目的にはお菓子屋さんや食堂を除いてあまり結びつかなかったように思います。それは来場者の大半は観光客の方で買い物目的ではなかったということです。

そんな経験を踏まえながら、現在計画していますのが「大垣城はなまる市座」です。これは戦後の自然発生的にできた銀座街という市場が取り壊され、街の中心部に600坪の空き地ができました。その空き地を利用して、大垣のシンボルである自噴水の井戸を掘って憩いの場を作ったり、それを中心として有機栽培の朝取野菜を販売したり、西美濃で取れた食材を使った飲食店を配置したり、常設のフリーマーケットのコーナーがあったり、リサイクルを中心とした環境コーナーが

あったりするものです。朝から夜までそれぞれの世代が楽しんでもらえる賑わいの場を目標としています。過去の経験を踏まえ、地域に密着した商材をふれあいをモットーとしたサービスで販売することが大切だと思います。言葉を変えれば、経済第一主義の郊外の大型店に対抗していくには大型店ができない切り口で勝負するしか生き残る道はないと考えています。商店街の一角にそういった集客装置ができれば、既存のお店も少しずつ変化していくのではと期待しています。

平成13年度の夏ごろには完成させたいと考えていますので、またご批判をいただけたら幸いです。最後までご静聴いただきありがとうございました。

中京圏における大型商業施設の展開

伊藤 健司（名城大学経済学部産業社会学科）

1990年代後半、それは日本経済が低迷する中で、いたるところに大型商業施設が出現した時代であった。総合スーパーは単独のショッピングセンターから、トイザらス、スポーツオーソリティ、ユーホームなどのように、それ自体が大型店となりうるような大型専門店を併設するようになり、シネマコンプレックスを併設するものも増え、ついにイオン岡崎ショッピングセンター（ジャスコ岡崎南店＋専門店街＋西武百貨店）のように郊外型百貨店を併設するに至った。

このような大量出店、大型化、複合化が同時に進んだ要因としては、それまで大型店の出店を調整してきた大規模小売店舗法（大店法）が1990年代前半に緩和されたことがある。この規制緩和により出店が比較的容易になり、小売企業としてはより理想に近い形で出店できるようになった。一方で、大店法の緩和による相次ぐ出店により他社店舗との競合あるいは自社店舗同士の競合状況が生まれ、ドミナントエリアの防衛、他店舗との差別化が必要になったことも間接的な要因である。この競合はまた、1990年代を大量出店の一方でこれまでになく多くの店舗が閉鎖された時代にした。

ユニーを例にして、もう少しさかのぼって1960年代からの出店地域の推移をみると、明瞭に出店地域が変化してきていることが分かる。1960年代以前、名古屋市の市街

地と地方都市駅前に限られていた出店地域は、モータリゼーションの進展と郊外住宅地の開発という都市構造の変化を受けて、1970年代には地方都市では駅前以外の市街地や郊外、一部町村部にも広がった。この時期に出店されたユニー宮店は郊外型大型店の端緒となるものであり、長くユニーの中で最大の売上高をあげる一番店であった。大店法が強化された1980年代には再開発ビルへの入居などの例外を除いて、名古屋市内や地方都市駅前への出店はなくなり、地方都市郊外への出店がさらに進んだ。1990年代になると旧店舗の建て替え増床、あるいは紡績工場をはじめとした多種多様な工場跡地を利用することにより再び名古屋市内（ユニー中村店、アピタ港店など）、地方都市駅前（アピタ蒲郡店など）にも出店された。また、それまで少なかった町村部郊外への出店が始まっている。

以上のような1990年代の出店動向、および1960年代以降の出店地域の変化の結果、大型商業施設の立地と都市人口規模との関係に大きな変化が生じた。1991年と2000年について、各市区町村の人口と最大売場面積店舗（ここでは百貨店、総合スーパー、専門店などの業態は問わない）の売場面積との関係を見ると、1991年にはある程度の相関関係がみられた。しかし、2000年においてはそうした傾向はほとんどなくなり、アピタ北

方店、ジャスコ三好店、アピタ松阪三雲店、イトーヨーカドー岐阜柳津店などのように小規模都市や町村部に、岐阜市、一宮市、豊橋市といった主要地方都市よりも大規模な大型店が立地する事例がいくつも見られる。

ところで、近年、特に郊外型の大型商業施設では、競合店との差別化を図るためにシネマコンプレックス(複合型映画館)の併設が注目されている。中京圏でワーナーマイカルシネマズやユナイテッドシネマなどの外資系、あるいは松竹や東宝などの国内映画会社系のシネマコンプレックスが展開するようになるのは1990年代も後半になってからであった。これらは名古屋市外縁部(西区、港区)の他、地方都市や、さらには岐阜県では柳津町や真正町、愛知県でも阿久比町、三好町などこれまで映画館がなかった町村部への展開も多い。これらに先んじて、中京圏では1980年代後半から地元資本によるシネマコンプレックスが、パチンコ店などの娯楽施設と併設する形で、小牧市、春日井市、豊川市などの地方都市に展開されてきたのも特徴である。そして、シネマコンプレックスの増加とは対照的に、地方都市都心部に立地する地元資本の映画館は継続的に減少し、中京圏ではこの20年間に一宮市、大垣市など24

市区町村で映画館がなくなった。2000年にはシネマコンプレックスが、中京圏の映画館数(スクリーン数)の過半を占めるようになっていいる。これらの結果、以前は人口規模に応じて映画館があったものが、現在では中心都市である名古屋市の都心部に集中立地する映画館と、それ以外の地域のシネマコンプレックスという状況になりつつある。映画館という視点から見ても、地方都市都心部の商業集積が求心力を失ってきている様子が見て取れる。

郊外地域での大型商業施設の展開が続く一方で、地方都市の中心商店街の衰退。そうした状況の中で、大都市圏の中心都市である名古屋市の都心部では、百貨店の新規開店(JR名古屋タカシマヤ)や既存店(松坂屋名古屋店、名古屋三越本店)の増床計画が相次ぎ、都心型シネマコンプレックス(名古屋三越本店南館、毎日ビル・豊田ビル超高層化)も計画が進められている。つまり、名古屋市都心部はこうして大都市圏レベルでの中心性を維持し続けるが、それ以外の地域では、それぞれの店舗の商圏人口には依存するけれども都市規模には依存しない平準化された商業空間が形成されつつあるのではないかと考えられる。

(シンポジウム出席者40名)

【名古屋地理学会事務局から】

名古屋地理学会巡検のお知らせ

「湖北の風土・自然環境と長浜のまちづくり」と題して4月22日(日)に行われます。参加希望の方は、同封のはがき、または電子メールでお申し込みください(巡検詳細は別紙)。

2001年度第1回研究会の発表者募集

2001年度第1回研究会(6月23日を予定)の発表者を募集します。発表希望の方は事務局までご連絡ください。

名古屋地理 第14号・3
2001年3月発行
編集・発行 名古屋地理学会
〒464-8601 名古屋市千種区不老町
名古屋大学文学部地理学教室内
Tel 052-789-2236
FAX 052-789-2272(文学部共通)
電子メール ohnishik@lit.nagoya-u.ac.jp

【2000年度 名古屋地理学会巡検報告】

湖北の風土

自然環境と長浜のまちづくり

脇阪義和（東海高校）

<日時>

2001年4月22日（日）

<コース>

名鉄「新一宮」駅 一宮IC（名神高速）
米原IC 醒ヶ井養鱒場 長浜城・豊公園
長浜市街地・黒壁スクエア（長浜のまちづくりの見学） 昼食（各自）（湖岸道路経由）
湖北野鳥センター 木之本町大音（琴糸生産の資料館見学） 奥琵琶湖パークウェイ（リアス式海岸の見学）
木之本IC（名神高速） 一宮IC 名鉄「新一宮」駅

<案内者>

大西宏治（名古屋大）、澁谷鎮明（中部大）、
原 眞一（春日井高）、山田正浩（愛知県立大）、
脇阪義和（東海高）（五十音順）

前日の雨もあがった4月22日、一宮駅南口を、例年通りの箱根登山バスで予定時間の9:00を少し過ぎに出発。参加者は34人で、昨年よりやや少なめ。一宮インターから名神高速道路に入り、山田会長の挨拶、澁谷巡検委員の趣旨説明に続き、原常任委員長から行程に関する説明が行われる。低気圧が通過したあとの吹き返しの北風で、遠望がきき、進行方向には伊吹、養老山系が見渡せた。関ヶ原付近で、伊吹山（1377m）を間近に望むと、残雪は、山頂直下に冬季に発達した雪庇の名残り、雪崩で磨かれ岩が露出した樋状の谷（日本最南端の

アバランチ・シュート）の底にわずかに認められるくらいだった。関ヶ原地峡を抜け、米原インターチェンジで高速をおり、最初の目的地である醒ヶ井養鱒場へ向かうために国道21号を関ヶ原方面に少し戻る。南には伊吹山と向かい合って霊仙山（1084m）がそびえる。両山とも石灰岩でできているため、山頂には平坦面が広がり、山腹は急斜面である。養鱒場手前の霊仙登山口では観光バスから、おそらく団体であろう中年の登山者たちが山頂を目指して歩いていった。養鱒場に10:30頃到着、早速研修室で、案内ビデオを見る。バイオテクノロジーが駆使された養殖技術に一同感嘆。その後場内を散策、池や川など至る所に虹鱒が泳ぎ、昨年巡検で訪れた養老山麓で見たハリヨの観察池もあった。養老は扇端の湧水、こちらは石灰岩層の湧水という違いがあるが、生息地はこの付近に限られている。キャビア採取用のチョウザメも養殖され、1m前後に成長していた。山田会長の聞き取りによると、キャビアを採るためには数年以上の飼育が必要だが、キャビアを採った後そのまま廃棄するのは不経済なので、採取後腹部を縫合し、再び卵を採取することのこと。

バスは、米原駅の上を通り湖岸に向かう。湖岸近くには琵琶湖干拓資料館があり、かつては米原駅の近くまで内湖（琵琶湖岸のラグーン）が広がっていた。北風が強く、湖岸道路は波しぶきで濡れている。12時前

に長浜の湖岸にある豊公園駐車場に到着し、秀吉最初の居城である長浜城（内部は歴史博物館）を20分程で慌ただしく見学。この城は、昭和58年に天正期の城郭を想定し復元されたものである。バスでJR北陸線を越え、お旅所の駐車場で下車。黒壁スクエアの近くで長浜のまちづくり役場の方と落ち合い、旧開智学校の2階会議室でお話を伺った。40分程しか時間が取れず、十分な説明をして頂けなかったことは残念であったが、全国各地の地方都市と同様に中心街が衰退した中、地元有志による再開発が進められ、今や全国でも有数のまちおこしの成功例として知られるまでになった過程について理解を深めることができた。下見の時に、まちおこし役場でお話しした職員は瀬戸市からの出向の方で、長浜の成功に学ぼうと全国から出向者が続いているそうである。その後、昼食休憩を含み、各自市街地を散策した。黒壁スクエアの中心となる黒壁ガラス館は、教会として利用されていた明治時代の黒壁銀行を改装したもので、ガラスをテーマにした建物を集めることで女性客を集めている。黒壁スクエアを南北に貫く北国街道と、北東に位置する長浜御坊大通寺の門前町の町並みや、子供歌舞伎（長浜祭り）で有名な曳山に関する博物館など、各種見どころを整備することで、市街地中心部全体が観光地となっている。ちなみに筆者は湖北の高月町出身で、高校まで（約25年前まで）休日には長浜をよく訪れていた。当時を知るものとしてはあまりの変化に浦島太郎のような気分であるが、昔あったスーパーの跡地が博物館になっていたり、アーケードの小商店が英語名に変

わっていたり、整形前（失礼）の姿と重ね合わせると複雑な気持ちになるのも事実である。

2:30頃に長浜を出発、湖岸道路を北上し、小さな姉川三角州を過ぎ、湖北野鳥センターで短時間下車。遠浅で木々の繁る小島が浮島のように点在し、その向こうに竹生島を望むこの付近の風景は琵琶湖でも屈指のものである。以前から禁猟区となりラムサール条約にも登録されているだけあって、湖には野鳥が多く、付近には竹を湖に簾状に刺して魚を追い込む伝統的なエリとよばれる漁業施設も見られた。湖岸道路を離れ、続いて、古戦場で有名な賤ヶ岳山麓の大音集落を訪れた。ここは、水上勉の小説「湖の琴」にも登場する日本一の琴糸生産地である。時期的に実際の生産現場を見ることができないので、想古亭という料理旅館に併設された資料館で、熟練職人が糸の繭から糸を紡ぐ工程を見学した。バスガイドも熱心に見入り写真撮影をするほどで（いつも付近を通過すると話をするのだけれど、今回見られたのでこれからは実感と自信をもって説明できるとのこと）質問も活発に出ていた。最後に訪れたのは奥琵琶湖パークウェイで、中世の文書で知られる菅浦を通過し、琵琶湖の北端に突き出す葛籠尾崎パーキングで下車した。下見の不備で時間を読み誤り、竹生島を望む先端まで行けなかったのは反省点である。しかし、この頃には風もおさまりだし、快晴の空の下、輝く湖面の向こうに伊吹、鈴鹿山系や湖西の比良山系、さらには比叡山まで望むことができ、めったにない好視界を堪能しながら、一日の行程を終わることができた。

名古屋地理 第14号 - 4

2001年6月発行

編集・発行 名古屋地理学会

〒464-8601 名古屋市千種区不老町

名古屋大学文学部地理学教室内

Tel 052-789-2236

FAX 052-789-2272(文学部共通)

電子メール ohnishik@lit.nagoya-u.ac.jp